

幼児期における基本的動作を経験する取組み ～次世代の指導者養成と環境設定に着目して～

村田トオル（奈良佐保短期大学・健康運動指導士）

幼児期, 遊び, 基本動作, 指導者養成, 親子

I. 目的

文部科学省は平成24年3月「幼児期運動指針」を発表した。これは、子どもと日常的に関わる保護者、保育者が幼児期の運動をどのようにとらえ、どのように実践していくのかを共有する意図を目的としている。また動きを獲得するため「動きの多様化」と「動きの洗練化」を順序立てて指導する必要性を述べ、その方法として、幼児が意欲的に取り組む活動、すなわち遊びの重要性を指摘している。これからは健康運動に携わる健康運動指導士においても例外ではなく、遊びとなるメニュー提供が求められている。

本研究では、地域への貢献および次世代の指導者養成をしつつ、動きの多様化を促すことを目的とした親子体操教室の指導事例を報告する。

II. 方法

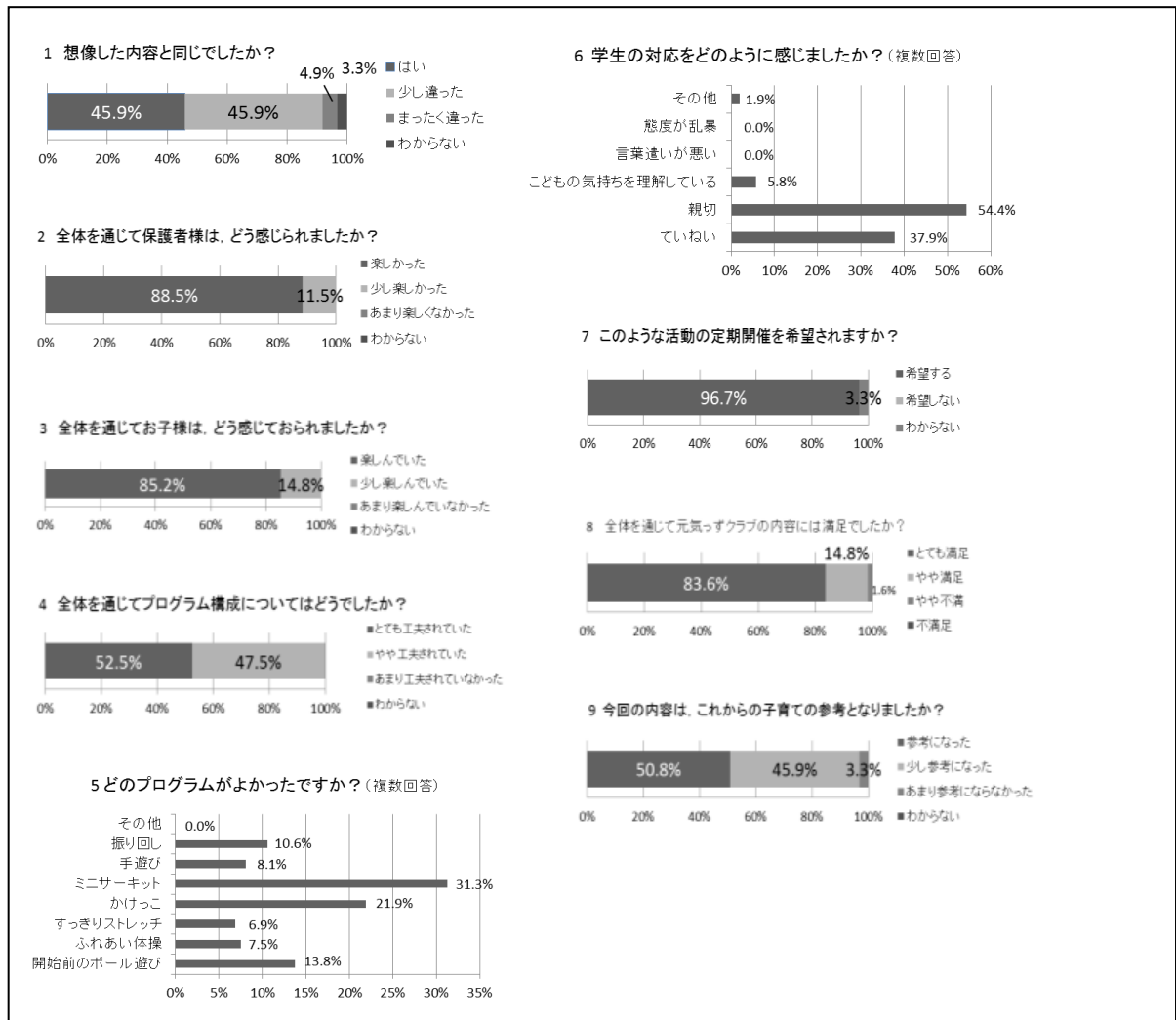
平成24年10月～12月、本学体育館において、地域こども学科1回生の学びの実践を兼ねて、地域の親子を対象（2歳～就園前）に「ならさほ元気っずクラブ」を開催した。開催日を月曜、水曜、金曜とし、それぞれ45分の開催時間とした。

本学内に設置されている奈良市地域子育て支援センターと共催したので（参加費無料）、市広報等の行政媒体が活用でき、幅広く告知することができた。その結果各曜日20組定員のところ、平均10組の超過申し込みがあり、学生と相談の上、希望者をすべて受け入れる態勢を作った。運営については、メイン指導者を著者とし、1クラスの履修学生24名を4グループに分け、受付、託児、サーキット設営等11の役割を分担した。プログラムについては、毎回自宅でもできるふれあい体操、かけっこ、および大型器具を使用するミニサーキットの各々15分3部構成とした。全体を通じてのプログラムのねらいは、①幼児期に必要な基本的動作の経験②身体活動量の確保。すなわち、動き回って活動欲求を満たし、なおかつ、飛び箱、マット、平均台といった大型器具を用いることで普段ではできない体験をすることである。

III. 結果

各曜日の最終日に保護者（すべて母親）を対象としてアンケート調査を実施した（ $n=61$ 、平均年齢 31.3 ± 2.8 才）。「想像した内容と同じでしたか？」については、「はい」の45.9%と同値で「少し違った」と回答があった。これは、いわゆる器械体操的なイメージを持って参加されたと推測される。「全体を通じて保護者様はどう感じられましたか？」「全体を通じてお子様は、どう感じておられましたか？」については、ともに「楽しんでいた」「少し楽しんでいた」で100%となり、親子で楽しめた様子がうかがえる。「全体を通じてプログラム構成についてはどうでしたか？」については、「とても工夫されていた」「やや工夫されていた」で100%となり、事前のロールプレイングや振り返りを通じて、学生がプログラムのねらいや構成を理解していたことが、評価に繋がったものと思われる。「どのプログラムがよかったですか？（複数回答）」では、「ミニサーキット」（31.3%）、かけっこ（21.9%）、「開始前のボール遊び」（13.8%）が上位3種目となった。ミニサーキットでは、家庭ではできないような、大型器具を用い、子どもが自分からしたくなる配置に工夫を凝らした。すなわち、「動きの多様化」を主眼に置いたからである。かけっこでは、約10M走った先に学生を配置し、タッチしてスタートまで戻ってくるなど、学生との触れ合いを多くした。ボール遊びでは、子どもの興味をひくような言葉がけを学生のほうから行い、楽しんでいた。このようなことが認知され評価されたものと思われる。「学生の対応をどのように感じましたか？」では、「親切」（54.4%）、「ていねい」（37.2%）となっており、誠心誠意の対応を心掛けたことが評価されたと考えられる。一方で、

「学生によって差があった」という意見もあり、学生教育の課題となった。「このような活動の定期開催を希望されますか？」では「希望する」が96.7%で、今後は新しい形式で継続開催する必要性を感じた。「全体を通じて元気づクラブの内容には満足でしたか？」では「とても満足」「やや満足」を合わせ98.4%ととなり、プログラムに加え、教員、学生が一体となって運営したことの評価を得た。「今回の内容は、これからの子育ての参考となりましたか？」では、「参考になった」「少し参考になった」を合わせ、96.7%でプログラムの意味や自宅でする場合の注意点を説明し、日常での子育てで活用できるよう意図して運営した評価を得たように思う。



IV. 考察およびまとめ

子どもの健やかなる成長を促すことを目的とした法整備は進みつつある。平成 27 年度に本格施行を目指す、子ども・子育て関連 3 法では、「すべての子どもの良質な育成環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援することを目的として・・・」を趣旨としている。換言すれば、親は子育てに悩み、親子関係では虐待、子ども同士ではいじめ、子ども自身ではキレる。そして生活習慣に起因する子どものメタボリックシンドロームなど、日本の未来を担う子どもがピンチに立たされている。こうした現代の子どもに起きていることを社会全体で真摯に向き合い、健やかな成長を支えようというのが目的といえよう。とりわけ人生の基礎ともいえる幼児期に携わる運動指導者の責任は重大であり、日々の指導内容だけでなく、未来を担うという視点を持つことが求められる。

本研究から、健康運動、発育発達、子育て支援など多岐にわたる視点からの関わりができる次世代の指導者養成と遊びを通じて動きの多様化を図ることを目的とした環境設定の重要性が示唆された。

V. 活動の様子

開始前のボール遊び



ふれあい体操・すっきりストレッチ (親のストレス解消)



かけっこ (活動欲求を満たす)



ミニサーキット (基本的動作の経験)

